



第 34 回看護の日事業

看護職員等からの体験談

当協会は、平成 20 年度（第 18 回）から「看護の日」にちなんで、「新人看護師からの体験談」を募集し、優秀作品を表彰してきました。平成 26 年度（第 24 回）からは、看護師養成機関からも募集するようになり、今年度は 89 件の応募がありました。どの作品にも、患者さんとの関わりを通して学び、看護への思いを深め、さらに気持ちを新たに看護に取り組んでいこうとする思いがあふれていました。応募して頂いた方々をはじめ、各施設の皆様に心より感謝申し上げます。

その中から、受賞者 7 名の作品をここにご紹介します。

受賞者

最優秀賞 1 名

松井 美揮子 （厚生連高岡病院）

優秀賞 2 名

佐伯 優 （かみいち総合病院）

森木 郷江 （市立砺波総合病院）

特別賞 4 名

寺本 璃胡 （富山西リハビリテーション病院）

福井 達也 （富山県済生会高岡病院）

松井 美希 （富山西リハビリテーション病院）

水上 葉月 （厚生連高岡病院）

公益社団法人 富山県看護協会

最優秀賞

大切にしていきたいこと

厚生連高岡病院 まつい みきこ
松井 美揮子

「あの、看護師さん爪切りお願いします」。休日とはいえ、たくさんの入院患者さんからの鳴りやまないナースコール、そのケアの多さで1年目の私には余裕がなかった。「あとでまた伺います!」。メモに「爪切り」と走り書きした。

患者さん一人一人の要望に向き合いたい気持ちはやまやまだが、優先順位を考えて申し訳なさを感じながら答えた。午後になって業務が落ち着き、ようやく終わりが見えてきたころ、走り書きを見て爪切りのことを思い出した。患者さんの部屋に行き、「爪を切りに来ました。遅くなってごめんなさい」と言うと、患者さんはすごく安心したような表情をしていた。

その爪を見たときハッとした。分厚く伸びきった爪。私はこれに気づかなかったのか。少し暗い顔で爪を切っていると、患者さんが「覚えていてくれてありがとう」と小さな声でつぶやいた。私が余裕のない姿を見せたから、待っている間本当に私が来るか不安だっただろう。看護師になって約9カ月、自分の看護が患者さんの思いに繋(つな)がっているのか実感が持てないままだった。けれどこの一言を聞いてやっと繋(つな)がったような気がした。

私は患者さんを待たせてしまうことがたくさんある。患者さんの目線、表情、環境、何か言いたそうにしていないか、今の私はそれに気付く余裕がないかもしれない。「ああすればよかった」と家に帰って後悔することの方が多い。それでも大切にしていきたいことは患者さんとの約束を守ることだ。1番近くにいる看護師が信頼される関係でいなければならないと、この日に強く思った。その信頼を築いていくために患者さんと目を合わせながら、私は当たり前小さな約束をする。

「また伺います!」

優秀賞

看護師としての芽生え

かみいち総合病院 さえき ゆう
佐伯 優

「日本で初めて自転車に乗ったのは誰か知ってる、私」と笑顔で話すA氏。私が看護師として働き始めて1年目の出会いだった。

自転車の話を聞いてみるも、小一時間生い立ちや仕事など自転車とは関係ない話が続いた。いよいよ自転車の話が来るかと思ったら「疲れたから休むよ。続きは明日だな」と笑みを浮かべた。私はA氏と翌日にまた話す約束をして帰路に就いた。しかし、A氏との約束の日が来ることはなかった。

次の日出勤すると人工呼吸器管理となり話せなくなったA氏がいた。先輩看護師に呼ばれ1年目の私にはA氏の看護は荷が重く、担当看護師から外れてもらうと言われた。しかしA氏との約束を果たし、もう一度あの笑顔を見たいと思い、先輩看護師と共に担当を続けることになった。A氏は一命を取り留めたものの、人工呼吸器を外せない状態が続いた。その間、私は先輩看護師と共に人工呼吸器の管理や口腔(こうくう)ケア、床ずれ予防などさまざまな技術を学んだ。A氏との約束を叶えられるよう懸命に看護を行った。

2週間が経過したころ、私が出勤すると先輩看護師に「A氏が呼んでるよ。早く行ってあげて」と言われた。病室に行くと人工呼吸器が外れ、話せるようになったA氏がいた。A氏は「ありがとうね。一生懸命してくれて」とかすれた声で言った。その時、先輩看護師から言われた「意識がなくても、話せなくても気持ちは伝わるんだよ」という言葉を思い出し、私は自然と涙があふれていた。泣き顔を見られまいと病室から出ると先輩看護師が立っていた。「よく頑張ったね」。先輩看護師の一言に涙が止まらなくなった。

その後、A氏は転院となり、結局日本で初めて乗った自転車がどのようなものだったのか聞くことはできなかった。この経験が私の看護師としての「芽生え」となった。これからも誰かの笑顔のために看護の道を歩み続けようと心に誓った。

優秀賞

思いに寄り添い、応えるために

市立砺波総合病院 もりき さとえ
森木 郷江

50代の男性Aさんは、食道がんの抗がん剤治療を行うため入院していた。Aさんは思い通りにならないと大きな声を出すので、看護師は様子を伺いながら対応していた。そんな時、Aさんが胃など消化管の壁に穴があく「消化管穿孔（せんこう）」を起こした。全身状態を考え、保存的治療を行い経過を見ることとなった。状態は快方に向かい、医師からAさんに手術など今後の治療について説明をされたが、結論は出なかった。その頃、Aさんがリハビリスタッフに「ろくな人生じゃなかった」と話していると耳にした。

ある日、Aさんの担当になった。Aさんがリハビリスタッフに話していたことを思い出し、自分にできることはないか考えて、「少し廊下を歩きませんか」と声を掛けた。談話室の椅子に腰を下ろすと、Aさんはぼつりぼつりと話し出した。「つらい治療はせずに家に帰りたい。家族に迷惑を掛けている。料理人の弟が、亡父に料理を振る舞いたがっていたのに叶わなかった。せめて自分が食べてあげたかった」。涙を流しながら、たくさんの思いを語った。この時私は、Aさんの怒りっぽさの裏に深い苦しみがあったことを知った。

その後、医師にAさんの退院への思いを伝えた。Aさんは再度穿孔を起こすおそれがあるため、医師からは難色を示されたが、看護師の後押しがあり、本人の思いをくんで3日間一時退院することになった。再入院後は徐々に病状が進行し、2カ月後に永眠された。一時退院した際、Aさんは弟さんの作ったスープを食べたと聞いた。一つでも望みが叶えられてよかったと思った。

私たち看護師は、患者さんの病気だけでなく、その人自身に関心を向けることが必要だと思う。Aさんとの関わりから、言動の裏にある思いは何か知ろうとすること、思いを受け止めて繋いでいくことの大切さを学んだ。患者さんの心に寄り添い、応えることをこれからも続けていきたい。

特別賞

ありがとう。

富山西リハビリテーション病院 てらもと りこ
寺本 璃胡

私は回復期リハビリテーション病院で 2 年目看護師として勤務する中で、忘れられない患者がいます。それは、誤嚥（ごえん）性肺炎後に栄養失調、筋力低下が進み自力で歩くことができずに入院したA氏でした。A氏は入院時、嚥下（えんげ）障害のため胃瘻（いろう）から胃に直接栄養を注入しており、私はその回復過程で関わりました。

病前の楽しみは食事と趣味の写真撮影で、整体師として勤めていたそうです。私に「手が固まって動きにくいし、もう働くこともカメラのシャッターを押すことも出来ないかもしれない」と発せられた言葉には、深い悲しみと無念さが宿っていました。私は物理的な回復だけでなく、心のケアも必要だと感じ、日々寄り添う看護を心掛けました。挫折感が見受けられた時には、看護師やリハビリスタッフで彼の頑張りに共感し、徐々に信頼関係を築いていきました。

食事摂取は特に難しいものでしたが、A氏の好みを尊重し栄養士や言語聴覚士と協力しながら、工夫を凝らしました。すると次第に嚥下機能も改善していき、胃瘻を使用せず完全に経口摂取となりました。その時の喜びの表情は、私たちスタッフにとって何よりの報酬であり感慨深いものでした。

看護の過程でA氏は、病棟での歩行練習を意欲的に取り組み、数週間の努力のすえ、最終的に自宅に帰ることができました。退院の際A氏が「〇〇さん、本当にありがとう。私がここまで回復できたのはあなたたちのおかげです」とほほえむ姿を見たとき、看護がもつ深いやりがいと、患者との絆の重要性を改めて感じさせてもらえました。

今でもA氏は外来受診と通所リハビリに来院され、偶然会えたときには「〇〇さん！お久しぶりです！最近撮った写真見てください」と笑顔で駆け寄ってくださいます。趣味に没頭し元気に過ごす姿を見ることができ、患者の人生の一部に関われたことが、看護の喜びであると気付かされました。

特別賞

大好きなパパとの思い出

富山県済生会高岡病院 ふくい たつや 福井 達也

私が入職して3年目の頃、肺癌(ステージⅣ)と診断された40歳代の男性K氏とその家族の話です。

K氏の病状は、徐々に痛みが強まり、体重は減少、ベッド上で過ごす時間が増えていました。K氏は家族の前で弱音を吐くことはありませんでした。また、自慢げに「俺はとび職人で、高いところで働く姿を娘は好いてくれてんだ」と、苦痛の表情を笑顔に変えて私に話してくれていました。ご家族は毎日面会に来ていて、3歳の娘さんが「パパはいつ良くなるの？ またおんぶしてほしいな。そして、また高いところでお仕事できるといいね」とK氏に話していました。二人の会話を見ていた奥さんは、一人泣いていました。私はそんな奥さんに掛ける言葉が見当たりませんでした。

K氏の死期がいよいよ近づいた時、K氏に何かできないか、K氏らしさとは何か、チームでどのように関わっていけば良いかをカンファレンスで話し合いました。そこで1カ月早いK氏の誕生会を提案し、奥さんと娘さんと協力して開催しました。当日、車いすに座るK氏が娘さんをおんぶできるように介助しました。すると、娘さんは不安そうな表情から一変して満面の笑みを浮かべて「パパの背中大きい、好き」と言いK氏に抱き付きしました。K氏もうれしそうに笑みを浮かべていました。短い間でしたが、穏やかな時間が過ぎました。その数日後、K氏は息を引き取られました。私はK氏に一張羅のニッカポッカを着てもらい、お見送りをしました。

数カ月後に奥さんが来院されて、「娘にパパとおんぶできた思い出を残してくれた」と感謝されました。娘さんは「パパ、やっと高いところでお仕事できるね」と話していたそうで、奥さんは「パパはずっと高い所から見守ってくれているんだよ」と伝えたそうです。私はその話を聞き、看護の対象は患者さんだけでなく、ご家族も含まれると強く感じ、あらためて家族看護について考えることができました。

特別賞

やりたいことリスト

富山西リハビリテーション病院 まつい みき
松井 美希

私が回復期リハビリテーション病棟で受け持ったAさんは肺がん末期の方で、足の骨折後のリハビリ目的で入院していました。笑顔が素敵な方で、いつも一緒に暮らしている家族の話をしていました。リハビリにも懸命に取り組み、家族も退院を目指してAさんを励ましていました。

しかし、2カ月ほど経ったころから、肺がんの進行が進み様態は悪化していきました。笑顔が少なくなり、寝たきりとなったAさんを見て家族は「家に帰って母を看（み）る自信がない。一緒に家に帰りたいが、不安が大きくどうしていいかわからない」と面会の度に涙を流していました。スタッフ間でも、Aさんの状態や家族の介護負担を考えると療養先の病院を調整する方向が望ましいのではないかと話し合いを進めていました。

そんなある日、先輩看護師からAさんのベッドで見つけたという一枚の手紙を渡されました。そこには「うどんを食べる」「家族にカレーを作ってあげる」など、Aさんが家に帰ったらやりたいことがいくつも書かれていました。「家族と患者が自宅で最期を過ごすために、看護師ができることはまだあるよ」。先輩から教えられた私は、Aさんの家族や担当スタッフと相談を重ねました。それから10日間ほど掛けて退院に向けた在宅支援のサービス調整が行われ、私は毎日家族にAさんの介護を指導しました。

一緒にAさんの体に触れて、会話を重ねると家族の不安も少しずつ軽減されたように感じました。私自身も、患者や家族の目線に立ち、自宅で療養生活を行う上での悩みや不安を共有することで、工夫しながらケアを行うことができました。退院日に見たAさんと家族の笑顔が今でも心に残っています。患者や家族の不安を少しでも取り除いて在宅生活へ繋げるために、看護師としてできることを今後も模索していきたいと思います。

特別賞

業務ではなく看護を

厚生連高岡病院 みづかみ はづき
水上 葉月

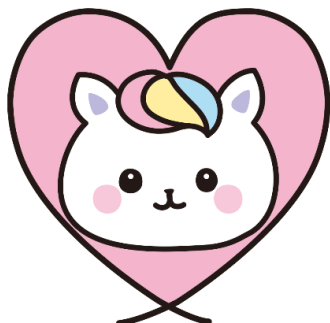
看護師として半年ほど働いたときに、ふと学生の時より患者さんと話す時間が少なくなったと思った。慣れない業務に加え、分からないことが多くて勉強に追われているうちにそうなってしまっていた。そんなとき、緩和ケア病棟に転棟（てんとう）される患者さんに思いを聞く機会があり、私は久しぶりに座って患者さんと話すことができた。

その患者さんとは長く接してきていたが、その時初めて患者さんの思いを聞いた。「自宅に戻って身の回りの整理をしたい」「ドナーにはなれるのだろうか」「痛みは少なく過ごしたい」など、患者さんの言葉はあふれるように次々と出てきた。私は一つ一つの言葉にうなずくことしかできなかったが、最後には「こんなに話すことができてすっきりした。ありがとうね」と言われた。

その言葉を聞いたとき、私は泣きそうになってしまった。患者さんはこんなに思いを持っていたのに、私は今まで気付くことができなかったのかと悔しさでいっぱいになった。私がもっと早く話す時間を取れていたなら、患者さんの気持ちを軽くできていたのにと考えてしまった。

看護師として働いているうちに、日々が業務だけで終わることもたくさんあった。しかし、業務を終わらせることを目標とするのではなく、患者さんに寄り添った看護を提供することを目標にしなければならないと思い出すことができた。看護師として、免許を持って働いているからには、患者さんにとって利益となるような看護の働きができたらいいなと思う。まだまだ慣れないことが多く、患者さんとたくさん話す時間を取ることは難しいけれど、患者さんを第一に考えて、日々患者さんとの「会話」を増やしていきたい。

5月12日は



看護の日

看護の心をみんなの心に

「看護の日」とは……

毎年5月12日は「看護の日」

その日を含む日曜日から土曜日までが
「看護週間」です。

看護の心、ケアの心、助け合いの心は
今後の社会を支えていくために大切です。

「看護の日」はこうした心の認知・普及のため、
近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの
誕生日にちなんで制定されました。



令和6年度看護職員等からの体験談

発行 公益社団法人富山県看護協会 富山県ナースセンター

〒930-0885 富山市鶴島字川原 1907-1

TEL 076-433-5251 FAX 076-433-5281

URL <http://www.toyama-kango.or.jp>